新説「トゥーランドット」のエンディング
――リューと絡めて考える――

生命科学科１年　K. K.

このオペラ「トゥーランドット」の中で最も目立つ登場人物は、言うまでもなくトゥーランドットとカラフであるが、リューもかなり重要な登場人物であると思った。第１幕では、トゥーランドットに一目ぼれし自分の命を懸けてでもトゥーランドットの謎に挑もうとするカラフを説得するアリア「王子、お聞きください」、第３幕では、カラフの名前を知っている人物として拘束された時に、愛がここまで頑なな心を生み出すのですと言うアリア「氷のような姫君の心も」と、２つの印象的なきれいなアリアを歌っている。第３幕では、カラフへの愛ゆえに秘密を守ったまま、役人から奪ったナイフを自分の胸に突き立てて死に、見る人の心に強く印象を与えた。このようなシーンがあることからも、このオペラにおいて重要な人物の一人であると思った。

しかしここで気になったのは、リューが自死した後のストーリーである。トゥーランドットは、リューが「氷におおわれたあなた様　でもあなた様も熱い炎に負け　あの方を愛されるでしょう」と言ってから自死したことや、カラフのキスによって愛に目覚めたと考えられるが、トゥーランドットからみれば、リューはカラフに思いを寄せる「別の女」であり、そのリューの自死は「愛が深まる」要素ではないのではないかと思った。さらにカラフは、目の前で自分への無償の愛を告白して死んだリューがいるにもかかわらず、その亡くなった目の前で、別の女性であるトゥーランドットを口説き続けた。これは人間的にもどうなのかと思ってしまう。(○考え方によっては、今まで何人もの人を処刑してきたトゥーランドットと同じぐらい残酷なのではないかと思ってしまう。)トゥーランドットは今まで頑なに愛を拒んでおり、キスは、今回のカラフとのキスが初めてだったので、いきなり愛が目覚めたとも考えられるが、そうは言ってもちょっと飛躍しすぎなのではないかと思った。さらに、カラフがトゥーランドットに名前を明かした直後のトゥーランドットの表情を見ると、カラフを処刑してしまうのではないかと思っていたので、その後「その名は　愛です」と言った時は、驚いた。

そこで、自分なりのオリジナルのエンディングを考えてみた。「カラフはふと目が覚めると、処刑される直前であった。今までの出来事は夢であったらしく、高らかに笑うトゥーランドットを、カラフは呆然と見ていた。」あまりに愛も夢もないエンディングだが、こんなことを考えてみた。